令和２年度テーマ展

新収蔵品展

平成 30 年度～令和 2 年度

あわら市郷土歴史資料館

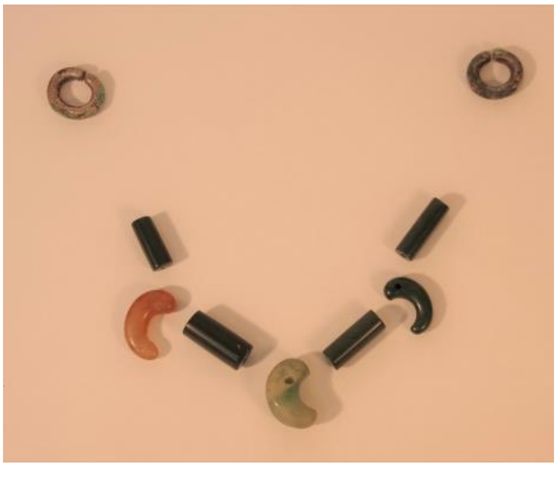
本展は、平成 30 年に開催いたしました「新収蔵品展　平成 26 年度～29 年度」に続く新収蔵品展第 2 弾となります。今回は平成 30 年度から今年度 6 月末までにご寄贈もしくはご寄託いただいた品々の中から、これまで展示で使用していないものを公開いたしました。考古遺物から昭和 40 年代末まで使用されていた民具まで、様々な時期のあわらの歴史を語ってくれる品ばかりです。

展示は途中一部の作品を入れ替え、前期・中期・後期に分けての 3 期構成となっております。

☆展示品紹介☆

【八皇子山(はちおうじやま)古墳群出土品】（寄託品）（展示期間：通期）

伊井地区矢地にある八皇子山古墳群には､円墳４基、前方後円墳１基、横穴墓２基があり、これらは古墳時代後期に造営されたとみられます。この古墳群の横穴式石室から、昭和８年（1933）に各種の副葬品が発見されました｡ヒスイ･碧玉(へきぎょく)･メノウで作られた勾玉(まがたま)､銀メッキが施された耳環(じかん)など、その豊富さから古墳時代の矢地には大きな力をもった豪族がいたと考えられます。写真は勾玉、管玉(くだたま)、耳環。



【指中神社の石造狛犬(こまいぬ)】（寄託品）（展示期間：通期）

神社に参拝すると参道に石造狛犬をよく見ることでしょう。しかし、このような石造狛犬が参道に置かれる歴史は浅く、古くても明治時代のことで、多くは大正・昭和時代に作られたものです。

越前狛犬とは福井県産の緑色凝灰岩（ぎょうかいがん）、いわゆる笏谷石（しゃくだに）で作られた狛犬の総称です。髪型や尾の形に特徴があり、古いものだと戦国時代から作られています。越前狛犬は石造狛犬としては全国的に見ても古く、福井県を代表するお宝の一つなのです。右の狛犬は細呂木地区指中にある指中神社のもので、永正 14 年（1517）銘を持ち、越前狛犬の中でも 2 番目に古いものです。

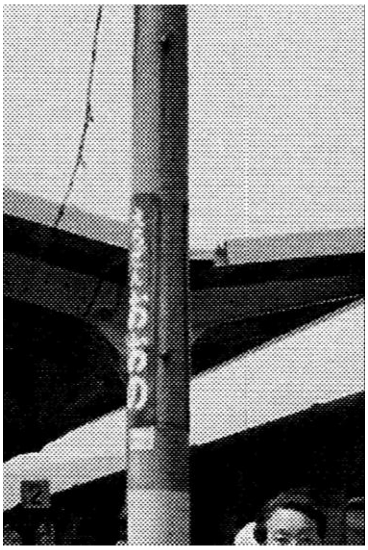
【石帯（せきたい）】（寄贈品）（展示期間：令和 2 年 10 月 27 日～12 月 27 日）

「いし（の）おび」とも読みます。帯という名前なのに、表が重なっているような形を不思議に思われる方も多いでしょう。これは間違って結ばれているわけではなく、分厚い革製で伸縮性がないことから、いつしか背中側で挟み込まれるだけの飾り帯となったものです（右の白丸で囲った部分）。ひな人形のお内裏様（だいりさま）の背中で見たことがある方もいらっしゃるのではないでしょうか。

右参考図：『御大礼図譜』（池辺義象・今泉定介編、博文館、1915 年）

【「かなづ」の駅名看板】（寄贈品）（展示期間：令和 3 年 1 月 5 日～5 月 9 日）

昭和 47 年（1972）3 月、金津駅と三国港駅を結んでいた旧国鉄三国線が廃止されました（芦原駅と三国港駅間は戦時中から休止）。同年同月金津駅は芦原温泉駅と改称され、同年 11 月には現在の駅舎が建てられました。この看板はその旧金津駅のホームで使用されていたものです。残念ながらこの看板が掲示されている様子を確認できる写真や映像は見つかっていませんが、右写真（『坂井・あわら・奥越の昭和』より旧国鉄越前大野駅の看板）のように取り付けられていたものでしょう。

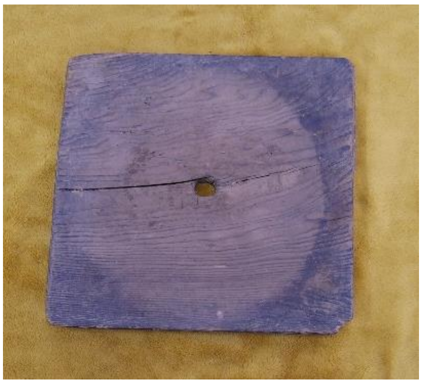


【本荘小学校東善寺分校の瓦】（寄贈品）（展示期間：通期）

昭和 41 年（1966）に廃校になった、本荘小学校東善寺分校で使われていた５点の瓦の中に、波兎（なみうさぎ）の文様を配した土製の瓦があります。この図案は、あわら市郷土歴史資料館からあまり離れていない民家の屋根にも見られますが、実は江戸時代の初期にはその存在が確認できる歴史ある図案です。元は謡曲（ようきょく）（能楽の謡）「竹生島（ちくぶしま）」の詞章「緑樹（りょくじゅ）陰沈んで、魚（うお）木に登る景色あり、月海上（かいしょう）に浮んでは、兎も波を走るか」に由来すると言われていますが、図案の意味ははっきりとは分かっていません。

兎に子孫繁栄や長寿、波に防火、波に乗るという意味で商売繁盛（はんじょう）など、色々考えられそうです。正解は一つでないと思いますが、皆さまはどう思われますか。

【ドウコ、鏡板】（寄贈品）（展示期間：通期）



ドウコは竈（かまど）のことで、焚口に薪をくべて湯を沸かし、食べ物を煮たり蒸したりする際に使用した道具です。寄贈者の家では、鏡板の上に丸い蒸籠（せいろう）を三段重ねて餅米を蒸し、12 月 30 日の餅つきや、1 月 25 日ごろに「かき餅」を作っていました。釜の部分が大きいので、何度も水を足す必要がありませんでした。ドウコは家の土間に置かれ、戦前から平成の初めごろまで使用したといいます。また、近所の人が借りにきて、縄をかけ天秤棒を使って持って行くなど重宝されていました。燃料である薪は山へ行って拾ったり、親戚がいる細呂木地区で買ったりもらったりして使いました。写真は鏡板。中央の穴から蒸気が出て、上に置いた蒸籠に通しました。

【藤箕（ふじみ）】（寄贈品）（展示期間：令和 2 年 10 月 27 日～12 月 27 日）

穀物を実と殻に選り分けたり、物をすくったり干したりする道具です。綻びやすい先端は丈夫な桜の皮で作られています。寄贈いただいた資料は、昭和 45 年頃に寄贈者のおじい様が製作していた藤箕で、竹や藤、桜の皮で作られています。あわら市北潟の山で竹や桜を、加賀との県境の山で藤や桜を、福井市麻生津（あそうづ）の山で藤を材料として調達しました。藤は木槌（きづち）で叩いて割り 2、3 枚の皮にしました。
製作した藤箕は金物屋で当時の金額で 1 万円から 1 万 2 千円で売れたそうです。
また、寄贈者のお父様達は、あわら市中番（なかばん）で藤箕の修理もしていました。

【大工道具】（寄贈品）（展示期間：令和２年 10 月 27 日～12 月 27 日）

あわら市伊井は近世の越前における有力な大工村でした。本荘地区の春日神社本殿（福井県指定文化財）は伊井村の大工である杉原加右衛門、同七右衛門ら６名が建てたものです。また、伊井地区にある伊井白山神社本殿（あわら市指定文化財）も、伊井村の大工が建てたと言われています。

展示している大工道具は伊井地区にお住まいの人からご寄贈いただきました。その中の一つである写真の「墨壺」は、材に墨で線を引く道具です。古代中世の墨壺には軽子（糸を先端に結び付けて材に差し付ける道具）はなく、江戸時代に付けられたとも言われています。展示品は合成樹脂製で、近代に入ってから機械生産されるようになったものです。

【製図用の定規】（寄贈品）（展示期間：令和３年１月５日～5 月９日）

昔のものさし、なのですが、１メモリ当たりの長さが違うことに気付かれたでしょうか。右の写真を比べていただくと一目瞭然かと思います。写真では見づらいですが、それぞれのものさしの中央部に、上から 1/20 尺・1/30 尺・1/40 尺・1/50 尺・1/60 尺という文字も刻まれています。

実際に図面を引くお仕事や学問をされる方の中には、現在もこの定規のミリメートル版を使われる方も多いでしょう。これは縮尺図を作る際に使用されるものさしです。例えば 1/50 尺のものさしでは、１メモリが 50 分の１尺（6.1 ミリメートル弱）を表します。この物差しを使って図面を書くと 50 分の１の縮尺図を正確に作ることができる、という優れものです。

「新規収蔵品展　平成 30 年度～令和２年度」

会　　期：令和２年 10 月 27 日（火）～令和３年５月９日（日）
開館時間：9：30～18：00（最終入館は 17：30）
休 館 日：毎週月曜日・第４木曜日（その日が祝日の場合はその翌日）、
　　　　　12 月 29 日（火）～1 月３日（日）
お問合せ：電話：0776－73－5158（郷土歴史資料館直通）